「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 26 年　7 月　29 日
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏　名	北島龍之介

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

京都府、京都大学

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

第二回京都大学ー稲盛財団合同京都賞シンポジウム

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 26 年 7 月 12 日

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回の京都賞シンポジウム聴講にあたり、目標を２つ用意していた。ひとつは個人的に憧れている Svante Pääbo 博士に会うこと、もうひとつは音楽を専門とされる先生方がどのようなプレゼンテーションをするのかその手法を学ぶこと、である。

私が Svante Pääbo 博士の研究を知ったのは大学生の頃で、それ以来博士のファンとなった私は、霊長類研究所に所属後、お会いする機会がないかと秘かに心待ちにしていた。今回の公演でも、博士は古代ゲノム解読にまつわる興味深いお話をされていた。期待通り、それは大変興味深いものであったが、さらに今後の展開として iPS 細胞を用いた進化研究の可能性に関しても触れられていた。博士は既に古代ゲノムという分野で確たる立場におられるが、それでもなお新しい手法・領域に挑戦するというその姿勢には、歩みを止めない研究者のあるべき姿としていたく感服した。

講演が聞けただけでも満足ではあったが、チンパンジーiPS 細胞研究者の端くれとして、是非とも博士と直接お話ししたかった。そこで、講演後の休憩時間にお話する時間をいただき、博士の考えておられることや私の考えなどをお話させていただいた。博士は私の拙い英語にも辛抱強く耳を傾けてくださるとともに、気さくにご自身のお考えをお話くださった。僅かな時間ではあったが、憧れの研究者との議論は心躍るものであり、自身の研究に対する士気が大いに鼓舞された。次にお会いする際には博士を唸らせるような研究結果を携えていきたいと思う。

音楽分野のセッションでは、近藤譲先生のご講演が印象深い。先生は作曲家であり音楽評論家であるが、各所で教鞭をとっておられたこともあり、お話が非常に論理的でわかりやすかった。昨今、わかりやすいプレゼンテーションのためには PowerPoint など視覚的手段に頼りがちだが、先生はそれを使うこと無く、適切な論理構成と喩えを用いることでわかりやすさを実現していた。残念ながら、私の研究分野においてはスライドを全く使わないことは難しいが、本質的に重要なのは話しの中身や構成であると再確認できた。

一方、緻密な論理構成に加え、要所々々に示された先生の情緒的側面に大きな感銘を受けた。例えば、「星々はランダムに配置されているが、それでも美しい」という現代音楽に関する喩えや、「曲をつくるにあたり、自然をありのままに捉え、表現することを心がけてきた」という言葉だ。実際先生のつくられた曲には、和音や旋律といったクラシック音楽における文法が意識的に廃され、解釈は聞き手に委ねられている。しかしそれゆえに純粋な音の並びそのものを用いることができ、そこに自然のありのままの美しさを表現できるのであろう。音声言語を獲得したヒトは、連続する音を区切り、意味を抽出することに長けているが、先生はあえて音の構造をわかりにくくすることで「ランダムな音の列なりの内に核音を追う聴覚的旅」へいざないたいのだという。

私達自然科学者は日頃から自然を区切って理解しているが、近藤先生のつくった曲を聞く際にも同様に分析的姿勢が求められているようで、その点が個人的に興味深かった。そういう意味で、現代音楽は作曲家にとっても、聴衆にとってもチャレンジングなものなのだろう。

６．その他（特記事項など）